

パネルディスカッション

# 震災とアート

2020年12月19日(土)

13:15~15:00

神戸学院大学ポートアイランドキャンパス

コロナ禍のため下記QRコードよりオンラインにてご参加ください

パネリスト



震災から25年〜「歌の力を信じて」

臼井 真氏(神戸市立高羽小学校主幹教諭)

1960年神戸市生まれ。震災時は神戸市立吾妻小学校(97年閉校)勤務。現在は、神戸市立高羽小学校音楽専科 主幹教諭。「しあわせ運べるように」は、神戸ルミナリエでも歌い継がれ、神戸から新潟、東北、熊本へ海外でも広く歌われている。小学生のための作詞・作曲オリジナル曲は400曲以上。平成17年度兵庫県教職員組合教育文化奨励賞受賞。平成18年度国際ソロプチミスト神戸東第一回グローバル賞受賞。平成22年度神戸市教育委員会教育実践奨励賞受賞、平成23年文部科学大臣優秀教員表彰。平成26年神戸新聞「平和賞」受賞、令和2年国際ソロプチミスト神戸東「千 嘉代子 賞」クラブ賞受賞。公式サイト「しあわせ運べるように」<http://www.shiawasehakoberuyouni.jp>

モデレーター



中田 敬司氏

(神戸学院大学現代社会学部  
社会防災学科教授)

パネリスト



「絵の力を信じて」

中嶋 洋子氏(アトリエ太陽の子 主宰・代表・画家)

造形絵画教室「アトリエ太陽の子」主宰代表

1982年 造形絵画教室「アトリエ太陽の子」を設立 2005年、2009年 ぼうさい甲子園「優秀賞」受賞

2015年 内閣府主催防災チャレンジプラン「特別賞」受賞 2016年 兵庫県功労賞「震災復興功労賞」受賞

2017年 防災まちづくり大賞「日本防火・防災協会長賞」

絵画を通じた被災地支援活動を、子ども達と共に継続して実施(国内外の被災地に子ども達の絵画を届ける活動など)

2011年 東日本大震災翌日3月12日から「1000本の命の桜プロジェクト」を開始。

被災地の復興を願って描く、巨大絵画「命の一本桜プロジェクト」の活動を継続。東北や熊本等の被災地で、のべ70校・約5500名以上の子ども達に心のケアのための出張絵画授業を実施

学生フォーラム 15:10~16:20

with コロナのボランティア活動

※事前申し込み不要

参加大学(学生パネリスト)

東北福祉大学、常葉大学、関西国際大学、兵庫県立大学、神戸学院大学

コーディネーター

江田英里香(神戸学院大学現代社会学部社会防災学科准教授)

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科主催 市民公開講座



神戸学院大学

□共催 社会貢献学会

問い合わせ先: 神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス 〒650-8586 神戸市中央区港島1-1-3 TEL:078-974-4206

## 現代社会学部主催市民公開講座

### 「震災とアート」

講演者 白井真 (神戸市立高羽小学校教諭)

中嶋洋子 (アトリエ太陽の子主宰・画家)

コーディネーター 中田敬司 (神戸学院大学現代社会学部)

日時: 2020年12月19日 (土) 13:00 ~

会場: 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス



中田:本日の公開講座のテーマは「震災とアート」です。よく考えてみると、震災とアートはどんな関係にあるのだろうか、逆に言うと、相反する関係のように感じた人もたくさんいらっしゃるんじゃないかと思います。本日はそのアート分野でご活躍されているお二人の先生にご登壇いただき、お話を伺うことで歌の力、音楽の力、そして絵の力が一体どんなもので、どんな力を持っているのだろうかということを、皆さんと一緒に確認し、そのうえで、新しい災害支援や被災者支援の在り方、加えて私たちの災害に対する日々の心の在り方も含めて考えていきたいと思えます。

それではどうぞよろしくお願ひいたします。

白井:皆さんこんにちは。今年は二番になりましたが、昨年度までは神戸で児童数が一番多く1300人の児童が在籍する神戸市立高羽小学校で、5年生と6年生を教えています。5年生と6年生だけでも430名くらいいます。私は来年の3月末で退職いたしますので、今年が最後の年となります。38年間、本当に神戸市の子供たちを教えられて幸せでしたし、子供たちとともにたくさんの曲を作ってきました。阪神淡路大震災後に作るつもりもなかった、地震をテーマにした歌をまさか

作るなんて、あの瞬間まではそんなことが出来るとは思っていませんでしたが、いろんな経緯を経て「しあわせ運べるように」ができました。この歌は、よく奇跡の歌と呼ばれているんですけど、本当にこの歌が出来上がるまでの経緯も奇跡的な事がありました。

私は「しあわせを運ぶ合唱団」という活動を、震災後10年目からやっています。その頃から色々なところでたくさんの人にこの歌を歌っていただいています。その中で自分が直接教えている子供たちに震災の歌を歌い継いでいく中心になってほしいと思い、「しあわせを運ぶ合唱団」を結成し、今年で16年目での活動になります。昨年までは150名～160名の子供たちが参加していましたが、今年で6年生だけで現在51名の子供たちとともに活動しています。今年はこのコロナ禍で口パクしかできない、マスクをしながら口ずさむ程度しか活動をする事ができませんでした。今週に入って初めて運動場で2メートルの距離をとって、外で寒い中で歌いました。子供たちがマスクを外した生の声を私自身が聞くのも、外でみんなで合唱するというのは10か月ぶりくらいでした。校舎に声がこだまして返ってきた時には、本当に感動しました。あの阪神淡路大震災直後に初めて音楽の授業ができた時を思い起こすくらいの体験でした。今週から寒くなったので手がかじかむような状況でしたが、子供たちはマスクを外して思い切り声を出せて気持ち良かったと言っていましたし、聞いていた先生方も校舎に声が響いて、生の歌声で子供たちの声が響くっていうのは本当に素晴らしいと言っておりましたし、私もその通りだなと思いました。

今年の卒業式は、全校生1300名もいる私の学校では6年生だけでも220名いましたので、体育館には6年生しか入れず、保護者は別の場所での参加となりました。また、一切歌は禁止という状況でしたので、歌は1曲も歌うことができず、こんな悲しい卒業式はないと思いました。37年間の音楽教師の中では当たり前前に「君が代」、「校歌」を歌います、と言って自分がピアノを弾いて歌うという卒業式でしたが、コロナ禍ではそれすらもできないという状況の中で、今週初めて子どもたちが歌えた瞬間でした。きっと子供たちにとっては、何十年か経った時にもずっと心の中に残っていて、(コロナ禍で)歌えない状況だった後に解放され、そこで歌を出せたという普通だったら感じられない経験をしたのではないかなと思ったりもします。

神戸市の音楽会のエンディングの曲で、「みえない翼」という曲があります。35年前になります。私が25歳の時に作った曲が神戸市の定番のエンディング曲として歌い継がれています。その歌詞の中で「みえない時間だけど時間の壁を越えられる 見えない翼だけど時間の壁を越えられる 音楽という翼を借りていつの日か思い出さだろうこの時を 忘れない忘れたくない 思い出の音楽会よ」という歌詞があります。25歳の時に、音楽の先生としての願いを子供たちに託して、若い頃の自分の情熱が溢れている曲ですが、まさしくその歌詞のように、今のこの状況のなかで皆が寒い中で今歌っていることは、いつか絶対時間の壁を越えて心の中に戻ってくるんだよ伝えていきます。

1月17日に市民の集いというのが毎年あり、震災のモニュメントのところで夕方の5時46分に私が指導している合唱団の子供たちがずっと歌ってきました。来年もなんとか少ない人数でも、25人を二つに分けてでも、1月17日はやはりあの場所で、震災の記念のモニュメントがあるあそこで合唱団の子供たちが生で歌えたらなと願って練習をしています。

子供たちが歌っているとき本当にきれいな心で歌っていて、歌っている目がきれいで、大人には出来ない、そういう清らかさというのを知っているからだからだと思います。私が「しあわせ運べるように」という歌を作った時に、この子供たちが持っている清らかさは絶対にたくさん

人たちの、辛い思いをされてる人たちの心を癒すことができると想像することが出来ました。宝石の涙と思っているんですけども、いつも「みえない翼」を歌いながら、どれだけ神戸市の子供たちが頑張ってきた音楽会の練習の最後に1曲の歌を歌いながらともに涙を零すということをしている場面もたくさん見てきました。

いつも最後の音楽の授業で「ラストソングー巣立ちゆく教え子へー」という曲を弾き語りします。震災の前ですから今から27年前に作詞作曲をした曲です。この曲を弾き語りしたときに、2クラスしかありませんでしたが、3年生から6年生まで4年間教えた子供たちがその歌を聞いて、「これで生の先生の歌、ピアノの音を聞くのも最後かな」と一緒に過ごした4年間のことを思い出して号泣したことがありました。

5部屋くらいある広い音楽室でしたので、「こっこの部屋で先生がピアノ弾き語りをしたけど全部の音楽室をまわって、最後に向こう側の部屋から出て帰ってね」と伝えた後に、もう一つの音楽室の黒板の全面に、子供たちが「音楽の先生が臼井先生でよかった」とか、「先生に出会えてよかった」とか、「一生忘れない」とかそういうメッセージを黒板の全面に書いてくれたことがありました。阪神淡路大震災の前の年の出来事です。本当に身体が震えて映画の1シーンかなと思うような出来事でした。

「しあわせ運べるように」が奇跡のように広がったという中には、絶対に音楽の神というのがこの世にいて、なにか力を与えてくれたような不思議さを持っています。またそれまで本当に感動して涙を流す子供たちをたくさん見てきましたので、それを知っていたから作れた曲かなと今は思っています。ありがとうございました。

**中田:** 臼井先生ありがとうございました。歌の力について分かりやすい納得のプレゼンテーションでした。後程ディスカッションはありますが、ここで臼井先生にこれだけは聞いておきたい、あるいは確認しておきたいという事はございませんでしょうか。もし何かありましたらディスカッションの際に質問の時間を設けていますので、その際をお願いいたします。それでは続きまして、絵の力。いろいろな地域に訪問され、多くの子供たちに絵を描いていただくプロジェクト。特に近年に至っては『命の一本桜』プロジェクトです。こういったプロジェクトを展開しながら多くの子供たちに元気を届けていらっしゃる中嶋洋子先生からご発表をお願いしたいと思います。先生よろしくお祈りします。

**中嶋:** 皆様こんにちは。中嶋洋子と申します。私は、ここ神戸で「アトリエ太陽の子」という造形絵画教室を主宰代表しております。今、ご紹介いただいた『命の一本桜』に至るまでの、アトリエ太陽の子の絵画を通じた支援活動の歩みをお話させていただきます。

まずこの『一本桜』を始める前にはじめた最初の原点は、臼井先生と同じであの阪神淡路大震災です。あの時、私の生徒が亡くなりました。そのことを思うと今でも涙が出るくらいです。そのことに対して、私は本当恥ずかしい話なんですけど、9年10年悲しすぎてなにも出来ませんでした。1月17日には子供たちを集めてその話をして祈りはしました。でも本当に行動出来なかった自分が恥ずかしかったです。でもその時にこれが内閣府から届いたのです。防災ポスターコンクールの募集要項、これを見た途端に、「私にはこれがある!」と思いました。そうです、絵画があるんです。この絵のポスター見た時に、これで子供たちと一緒に震災のことを語る、そして

また震災の勉強が出来ると思いました。このポスターを見て以来、アトリエ太陽の子では絵画を通した、震災・命の授業というのを毎年やっています。

この授業のやり方ですが、震災後生まれた子たちに、部屋を真っ暗にせず阪神淡路大震災を映像で見てもらうのです。そしたら、子供たちは自分の大好きだったあの三宮が、岡本の街が、そうして高速道路がぐちゃぐちゃになっている様子を見てびっくりするのです。そして、私はこの時に子供たちに語ります。幼稚園の子、1年生の子が分かるような簡単な言葉で、「みんなあの時死にたかっただろう？絶対に生きたかったのよ、死にたくなかったのよ」って語るんです。そしたら幼稚園の子供たちも、小学校も6年生も、みんな一生懸命に話を聞いてくれます。その時に私が言うのは、「あの時生きてくても生きられなかった人たちのことを、あの6434名の尊い命があったことを考えてほしい」と。それを考えた上で「みんな目を瞑って、そして想像して」と。「もしも、あの日あの時あの場所に、僕が、私が居たならば、どういうことになっていたと思う、それを置き換えてそれをみんな絵にしてくれる？」とみんなに頼みました。絵を描く想像力なのです。そうしたらこのような絵が出来上がりました。

これは高校2年生の男の子が描いた作品です。あの子たちが信じていた頑強な高速道路が飴のようになっているこの姿にショックを受けたんです。一生懸命描いておりました。

次は私のアトリエに通っていたヒトミちゃん、アカネちゃん、生まれたばかりの赤ちゃんとそのご家族の話を涙ながらに子供たちに伝えました。それを聞いて子供たちが、いっぱい描いてくれました。それは、5時46分、お母さんが赤ちゃんを胸に抱き、そしてヒトミちゃんとアカネちゃんを胸に抱きしめたところにお父さんが全身を使って、身体中で守ったんです。お亡くなりにはなりましたが、この親が子を想う愛情、どれだけの愛で皆が守られているかということ、子供たちはこれを描きながら考えるのです。

次の写真は10歳の子どものです。10歳の子供は、10歳の子供の気持ちで。そして高校2年生の子は高校2年生の気持ちで、お話を絵に、想像力を働かせて描いてくれました。

これは、ウノちゃんという女の子の話です。あの当時の長田区は工場が密集し、そして道路が狭かったため消防自動車が入りませんでした。そのため、火がどんどん燃え盛って、あの阪神淡路大震災の時に三日三晩燃え続けたんです。その時のお話です。お母さんは瓦礫に挟まれて動けないんです。そこへ子供たちが来て、お母さんを助けようとする絵なんです。お母さんは最初、「助けて、早く助けて」と言っていたんです。それが、火の手がどんどん近付くにつれて、お母さんは言いました。「お兄ちゃん、私をおいて逃げなさい、妹の手を繋いで逃げなさい」と。私この絵を見ると涙が出てくるんですよ。そして言うのです。「私の分まで生きなさい」と。この絵を見てください。お母さんの顔が、すごく上手な絵で大きくなっているんですね。これは、どれだけ愛しかったかということです。

子供たちはこの時静かに、静かに描くんですね。そして子供は思うんです、「僕はいま大好きなお母さんをおいて逃げれるだろうか、もしもこの時に居たら私はお母さんの手をこうして離すことが出来るだろうか」と。子供たちは描きながら「死ぬってことは、生きるってことはどういうことなんだろう」と考えるんです。自分が生きているこの今の時代、本当にボタンを押したら電気がつく、蛇口を捻れば水が出る、手をかざしたらお湯まで出ます。この今の便利な時代に、そしてこの当たり前の、「お母さんただいま」、「お母さんご飯まだ」とかというこの日常がいかに有難いかということをお母さんたちは絵を描きながらしっかりと考えて、考えて、描いていくんです。

これが私がやっている震災・命の絵です。本当に、この時やっぱりみんな考えているのです、悩んでいるのです。一生懸命祈りながら描いてくれます。

この震災・命の絵をアトリエで始めてから、どんどん被災地支援が始まりました。というのも、子供の方から、「先生、僕たちの得意技を使って何か人の役に立ちたい、人の役に立てられるなら僕は絵をどんどん描きたい」と言ってくれて、色々なところに支援活動をさせてもらいました。

これは、四川に絵を送った時ですが、子供たちは自分の絵が海外でこれだけ喜んでいただける、なんて嬉しいことなんだろうと、自分に対して自信を持ちました。先ほど臼井先生も仰ったように、本当に子供たちの心はきれいです。本当にきれいな目をしているし、きれいな心を持っているし、だから子供たちは天使なんです。だからこの子たちを、子供たちの心を揺さぶるんです。揺さぶって、引き出して、その心を自分たちがボランティアの芽を育てるといふか、人の役に立てる子に育てたいのです、私は。でもこの絵を描いたことによって、子供たちは目覚めました。

それから阪神淡路大震災のことを忘れてほしくないんです。風化してほしくないんです。それで始めたのが、この『1.17を忘れない 6434本の命のヒマワリを咲かせましょうプロジェクト』なんです。ご覧ください、これ一本指で支えていますでしょ。これ幼稚園なんです。垂らし込みという技法なんですけど、幼稚園の子が一生懸命亡くなった人の命のことを考えて描いてくれています。これはこの真ん中のヒマワリの茎を一生懸命描いていますでしょ。ヒマワリというのは次の年に何千個という命を育むんです、遺すんです。この子たちはあの時に亡くなった、生きなくても生きれなかった人たちのことを思いながら、一粒、一粒祈りながら、蘇ってください新しい命として、と子供ながらに本当に祈りの世界で描いております。

これは2009年にあった佐用豪雨災害です。その時の兵庫県立佐用高校で行った授業です。こうして高校生も、小学校も幼稚園も中学生も、全部一緒に『命のヒマワリ咲かせましょうプロジェクト』で頑張っていました。

やっと3402本くらいになった時にあの3月11日東日本大震災が発生いたしました。あの時ですね、私は悲しくて、悲しくて、一日中泣いておりました、朝まで泣いておりました。その時に「そうだ子供たちに伝えよう」と思いました。この次の日にどう動くか、これが教師として、大人として子供に見せるべきだと。それで翌日の3月12日、クラスとしては一番大きい土曜日のクラスだったんですが、新聞をいっぱい買ってきて、第一面を部屋中に貼って、子供たちを迎えました。そうしたら子供たちもすごく険しい顔で入ってきて、その時に子供たちに言いました。「皆さん、東北のあの地震を知っているよね、あの強い怖い津波も見たよね」と。「東北の子供たち泣いてるよ。みんな放っておける」って聞いたんです。そうしたらみんな首を振って「放っておけない」と答えたんです。ここで絵を描く僕たち私たちに出来る事はなんだろう、絵を描く僕たちに出来る事はなんだろうと言ったときに、子供たちから「先生、僕は自分の得意技で励みたい」という声が上がりました。そこで生まれたのが、この「春よ来い来い」です。「幸せ色よ来い来い、本当に一日でも早く暖かい春が来ますように」という思いを込めまして『1000本の命の桜プロジェクト』を始めました。その時に、幼稚園も小学校も中学校も高校も全部巻き込んで、ひと月あつという間にこの『1000本の命の桜プロジェクト』が出来ました。私は、次の4月24日から9日間、これを持って被災地へ飛んでいきました。その時に私はこの『1000本の命の桜』を、子ども達が一生懸命に描いた作品を避難所の周りの壁に貼って囲みたかったんです。なぜならば、この絵はこの桜色と子供たちの祈りが込められているからです。そしたら避難所の方々がありがとうと、心が

温かくなりましたと喜んでくださいました。

それから私がもう一つやりたいことがありました。それはこの青空教室です。どこへ行っても体育館は避難所になっていますし、救援物資でいっぱいなんです。あるところなんかは、ご遺体の安置所になっていて使えないということでした。だから太陽の下で子供たちに声を上げてもらって、自分より大きい10メートルの巨大鯉のぼりを描いてもらいました。子供たちは喜んで、声を上げて描いてくれました。

私は東北だけでなく熊本大地震の時も駆けつけました。これまでに延べ75校の学校に行かせていただいています。それから子供たちも、延べ5500人以上の子供たちの、被災地の子供たちの心のケアを絵画で、絵を描くことによってさせていただいています。本当にいろんなことをやってきました。これが巨大規模の鯉のぼりです。これはとびっきり笑顔の自画像、次は命のヒマワリです。最後にこの命の一本桜プロジェクトです。そうしたら、校長先生方が仰るには、やはり東北は寒いですね、そうして長い冬を耐えて、耐えて、耐えて、ぱっと春を告げるこの桜が皆さん大好きで、一番ご依頼が多かったのがこの『命の一本桜プロジェクト』なんです。

これからどういうところでやってきたのかを今からスライドで見ていただきます。ご覧ください。子供たちの嬉しそうな笑顔、本当に私たちは行ってよかったと思っております。

この『命の一本桜プロジェクト』の本当に一番良いことは、一人じゃ絶対出来ない大きさということなんです。8メートル×3.2メートルという大きさの紙に、絵が苦手とか好きとかそういうのではなく、とにかくみんなで心を合わせて一生懸命に描くというところで完成するんです。そうして描き終わった時に歓声と笑顔が織り交ざり、皆が抱き合っていて喜んでます。手を取り合っていて子供たちは喜んでます。言葉には言霊というものがあるんですが、私は絵にも絵霊(えだま)があると思っています。ですからこの桜を押し当てるときに、筆を使わずに自分の身体の一部を使って押し当てるときに、言霊ですね、絵霊を込めてもらうんです。津波が来たところ、これに対して津波になんか負けないぞって大きな声でみんな言ってと、大きな声で「この気仙沼を復興するぞ」、「東北を僕たちの力で復興させるぞ」、「一生懸命生きるぞ」と、みんな言葉に一生懸命込めまして、そして押し当てていくんです。そうして祈りが入るんです。この心いっぱい、いっぱい使った作品を見て、この子供たちの笑顔を見た時に、本当に良かったなと思っております。そして絵の力を感じております。

色々なところにいっぱい行きました。一番大きな作品がこちらです。福島、宮城、岩手、そうして一番大きな人数で行きましたら20人～100人、200人というのもありましたけど、この熊本の御船町立御船中学校と、滝尾小学校あわせて460人の子供たちが一斉に体育館で作ったものです。そこに先生も入っています。本当に「うわー」という声が沸き上がり、心をつにして絵を描く喜びを感じて皆で抱き合っているんです。出来上がった時の達成感ですよ。友達と一緒に描いたというこの思い出、あの苦しいことがあったけど、その後友達とみんなで仕上げたという喜び。これだけの大きさの8メートルの作品はすごいです。この作品が仕上がったんだという達成感、あの時の歓声は私は忘れられません。

東日本大震災からまもなく10年です。いやもう10年です、まだ10年です。この10年に対して東北の校長先生方はいま頭を抱えています。というのも、いま小学校に来る子たちは東日本大震災の後に生まれた子供たちが入ってきているんですね。そしていま来ている子供たちも記憶が薄い子供たちで、どういうふうにして命の尊さを伝えたいか、伝えるべきか、東日本大震災をどのように

伝えたいんでしょうかということで依頼が来ています。そしてその阪神淡路大震災のこと、命の尊さのことを先生語ってくださいと、そして東日本大震災の入口としてこの授業をする前に命の一本桜を描かせてください、というご依頼が続いております。本当でしたら今年も11月に萩荘小学校の370人で、一斉に、全校生で描こうという計画があったんですけど、コロナで残念ながら中止になりました。私は絵の力、音楽の力も素晴らしいし、でも絵の力、みんなで絵を描くという共同制作が大好きなんです。阪神淡路大震災の後、本当に悲しみに暮れました。でも人間には知恵がある、そして子供たちは天使の心を持っています。この子供たちの描く絵には、不思議な力があるんです。ですから、こうして命の尊さを伝えることと絵を描く命の一本桜の活動は、これからもずっと続けて参りたいと思っております。これは阪神淡路大震災を経験しました私たちの年代というか、経験した者はこういう使命を持って向かっております。ですから今日は、音楽の力と絵の力と、これを発表させていただいて、今日ここに来させていただいて本当に嬉しいです、有難いです。本当に今日は皆様ありがとうございました。

**中田**：中嶋先生、プレゼンテーションありがとうございました。熱意と情熱が伝わってくるお話を伺えたなと思っています。会場の皆さんから、中嶋先生にこれだけは確認しておきたいという質問はございませんでしょうか。大丈夫ですか。それでは今一度、お二人の先生方に拍手をお願いしたいと思います。さてこれから、ディスカッションに入ります。質問の時間を設けておりますが、もしも先生方にご質問がある場合は途中でも構いませんので、挙手をしていただければと思います。まず私は臼井先生、中嶋先生のお話を直接伺うのは初めてですし、お会いさせていただくのも初めてです。先生方はお互いお会いされてお話したことがあるということなのですが、それぞれのご発表をお伺いされて、改めて新たな感想とか確認したいこととか出てきたかもしれません。まず臼井先生の方からお伺いしたいのですが、中嶋先生のお話を聞かれてどのようにお感じになったのかコメント頂ければと思います。

**臼井**：中嶋先生にはちょうど10年前に初めてお会いしました。その時もパワフルで、「気合いだ、気合いだ」というプロレスラーの言葉を思い出しますが、やっぱりこれだけのパワフルさがあればこそ、たくさんの方、子供たちを集め、思いを一つにすることができるのだと思います。その時から、感じたものをずっと持続されておられ、テレビでも時々東北に行かれた様子とかも拝見しましたが、これだけの人を動かす力、原動力がやはり教え子の方を阪神淡路大震災で亡くされたということが起爆剤になっておられるのですね。

私は絵が苦手で美術が駄目だったんですけど、やっぱり描く喜びとか、そして一人じゃなくてみんなで共同制作しているということ、先ほどのすごい絵も10年、20年残って描いた人たちがまた、10年、20年後にその絵を見た時に、その時の思い出とか空気とか、そういう作品が残るところが素晴らしいと思います。

**中田**：それでは今度は、中嶋先生から臼井先生へ、改めてお感じになったことやコメントをお願いいたします。



中嶋：臼井先生は本当に神戸が誇る宝です。私は「しあわせ運べるように」の歌が大好きで、私本当に涙もろくて、この歌を聞く度に涙が出るんですよ。今日も涙を堪えるのが必死でした。この写真は、「アトリエ太陽の子」の何周年かの時に、私の夢だった県立美術館で展覧会をさせていただいた時のものです。一番最初に来ていただきたかったのが臼井先生だったんです。それが現実になって、臼井先生が指揮をしてくださり、お母様方も入れてもっと後ろにも向かい側にもいますが、200人以上の子供たちが県立美術館で、声を上げて、声を響かせて、絵の中で歌を歌わせていただきました。これは私にとって、「アトリエ太陽の子」にとって本当に誉のことなんです。今日は、佐渡裕さんの合唱の重厚さ、音楽でいっぱい色々な音が被さっての合唱の力、それから音楽の力の素晴らしさを本当ひしひし感じました。

被災地に行って思ったんですけど、やっぱり人を感動させる絵でも歌でも、この感動が傷んだ心を癒す力があると。私は現地に行って、現地の人たちと喋って、一番がこの感動を起こさせる、引っ張り出すのはやっぱり音楽と絵画の力だと思いました。改めてやっぱりあの歌は素晴らしいです。そして先生は400曲も作ってらっしゃるっていう素晴らしい方と一緒にさせていただいてすごいと思いました。ありがとうございます。

中田：中嶋先生ありがとうございました。お二人の話を伺いながら、本当にアートの力というのは様々なところで発揮されるものだな、と感じていました。さてここで、もっと前に遡った内容についてお二人に伺ってまいりたいと思います。そもそも論になると思いますが、現在、臼井先生は音楽の教員としてご活躍中です。なぜ音楽の教員になろうと思われたのかと同時に、震災時に音楽を届けようと思ったきっかけをお話しいただけましたら、また中嶋先生も同じことですが、先生が絵に興味を持たれたきっかけや、震災を通して絵を伝えていこうといった動機付けになったもの、その辺りについてお二人からお伺いできたらと思います。まず臼井先生からお願いします。

臼井：「高校3年生」という歌を歌っている舟木一夫という歌手が居ましてね、3歳くらいの時に郵便局の方が来られるたびに歌っていて、それが上手かったと、母が言っておりました。その頃から耳が良かったのだと思います。幼稚園に入った時、55年以上前の話ですが、ごみ箱の底の方にあったヤマハ音楽教室のオルガン教室の案内を引っ張り出してこれを習いたいと言ったんです。やっぱり自分で習いたいと思ったんですよ。オルガン教室に入った時も聴く力があつたので、絶対音感はあると思うんですけど、聞いた曲のメロディをオルガンで弾いたりとか、幼稚園の時に友達の特徴を歌詞作曲して、歌って母に怒られた記憶もあります。それがオリジナル曲1曲目だったかなと思います。今考えてもイ短調4分の4拍子で、主音から始まって主音に終わるので、短い曲ですけど、今考えたらその時から結構歌を作る力はあつたのかなと思います。

私は学校の先生になる気は全然ありませんでしたが、小学校1年から6年までピアノを習いました。教えてくれたのは、お年寄りの中学校の退職された男の音楽の先生で、優しいおじいさんだったんです。ピアノの先生はだいたい女の先生で、ヒステリックで、怒られて辞めた方も多いと思うんですけども、私の場合は優しいおじいちゃんでした。全然指のこととかは言わずに綺麗な曲を、基本的な練習よりも自分が好きな曲を教えてくれました。全然怒られなかったので6年生まで続いたんだと思います。楽譜もあまり読むこともしなかったんですけど、なんとなく先生

が弾いているのを聞いて覚えて弾くといったような、耳の訓練にはなっていたかなと思います。

中学校では、テニス部に入りました。運動部に入ることによってやっぱり音楽は出来ないし、友達からも当時はピアノを習っているだけでもちょっと気持ち悪いと思われ、ましてや男の子がピアノを習ってるなんて変みたいな時代でしたのでそんなこともあり、ピアノを一回辞めました。その後、中学2年生からヤマハのエレクトーンをやり始めたのですが、それが当時流行っていた指導者養成コースみたいなものでしたので、将来音楽系の大学を出てエレクトーンのプレーヤーになればいいかなんかの感覚でした。

大学では、教職も一応取って、教育実習で中学1年生を教えました。とても可愛くて最後に海援隊の贈る歌を歌ってくれて、教師もいいなと思いました。ただ職員室の大人の先生の間関係がちょっとしんどそうだなとは思いました。教育実習の担当の先生が結構良い成績を付けて下さって、「先生になるつもりはあるのか」と聞かれたのですが「絶対に嫌です」と言い切ったくらい、教師になるのは嫌でした。

「しあわせ運べるように」が世に出てから想像を絶するくらいの色々な方のインタビューを受け、色々な場に出てきました。ですが、それは人間って変われるのかなと思うくらいに慣れたというだけのことで、私は元々はシャイで、赤面もするし、対人恐怖的なものもあり、正式な場でピアノを弾くといったら指が震えて大失敗することもありました。ですから、もし採用試験の時に本当に先生になれなかったら失敗したと思うんです。

ですが、採用試験の時は半分遊びの感覚で受けまして、緊張せずにピアノの初めて見た楽譜を弾くという初検もすごく上手に演奏でき、リコーダーでショパンの「別れの曲」というのを吹いたんですけど、それも難しいところをすごく綺麗に吹けて、気が付いたらとんとん拍子で神戸市の採用試験がA採用になっていました。ただ、中学校の採用通知が来たら辞めようと思っていたのですが、たまたま小学校で男の先生が欲しいということになり、38年前に長田区の小学校に赴任して、そこから本当に清らかな子供たちの姿に、先生という仕事は素晴らしいなと気づかされました。逆に子供たちに磨いてもらって今まで続いたという、こんな経緯です。

**中田**：白井先生ありがとうございます。では中嶋先生同じ質問になるかもしれませんがよろしくお願いします。

**中嶋**：私は単純に本当に絵が好きで、いつも授業を聞きながらノートに絵を描いていたというような子です。日本舞踊もやっています。そっち側の方に親は行かせたかったみたいだったんですけど、でも美術部に入ってそこで会った太田先生が素晴らしい先生で、あの時に君は才能があると言われました。褒めていただけるということは子供にとって宝物ですよ。だから私が先生になった場合は絶対に褒めて、褒めて、とにかくこの子の才能を引き出そうというのが私の思いだったんです。その時に私は絵の方が好きでひたすら絵を描いていました。そして大学を出てから高校に非常勤として5年勤めさせてもらったんです。高校生はもう出来上がってしまったんですね。上手、下手とかそれを厳しくしすぎて隠して描く子までいました。どうしてそんな自信がないのかな？楽しめばいいのに？というのが私の思いでした。絵は芸術を楽しまなきゃ、楽しんで描くからこそ良い味が出る。自分のために描くのだから、上手いも下手もないです。だから、高校生を教えるよりはもっともっと下の小さい子たち、幼稚園の子から教えたいたいと思って

家で教室を始めたんです。それが絵画教室を始めたきっかけです。

私のところのアトリエは、子供たちをまず褒めます。だって素晴らしいんですよ、子供の絵って。どうしてこんなものが描けるのかなという絵を描いてくれますので、私は子供たちに下手な子なんて居ないよということが根本にあって、今教室をやっております。

**中田**：ありがとうございました。そもそものきっかけということで、音楽の道、それから絵の道に入られたお二人のお話を伺いました。さて、このような素晴らしい活動を展開されご活躍のお二人ですが、私がずっと気になっていたことがあります。それはたとえば地震とか災害に遭ったこんな大変な時に、音楽かよ、こんな大変な時に絵かよ、それよりも温かい食べる物や寝るところ、温かい布団とかそういうものをくれよ、とひょっとしたらそういった声もあったのではないかと思います。震災時にこうした音楽を届けること、絵を届けることに対して理解が得られなかったことやご苦労されたことがあるのではないかと思います。この点について、まずは中嶋先生の方からご報告いただければと思います。

**中嶋**：今、中田先生が仰ったとおり、私はやっぱり最初、震災の時に愕然としました。今要るのは水、食料、住む家だということを考えている時に、私の描いている絵とか、芸術家とか、こういう災害の時は力がないと悲しくなったのを覚えています。その時にいろんな企業家が、何億、何千万と寄付していて、やっぱり経営者の方が力があるなみたいなことが空しかったです。でも私は思いました。ひと月経って少し落ち着いたところに何が要りますか。私自身が心が折れました。ひと月は頑張れるんです人間は、負けるもんかと。でも、ひと月、ふた月、もうボロボロになりました。その時に要るのが音楽です、そして絵です、芸術です。人間はこの想像すること、想像力を失くしたら絶対にダメだと思うんです。想像力を豊かに育むことが、命につながると思いました。

**中田**：中嶋先生ありがとうございました。では、続いて白井先生いかがでしょうか。同じように理解が得ることができなかつたり、いろいろと抵抗があったのかもしれませんが。先生のご体験の中からお話いただければと思います。

**白井**：震災直後にある方から言われたんですけど、神戸の街から一番に消えたのが音楽だった、あの瞬間に消えたと言われました。まさしく私自身も自宅が全壊し、学校が避難所となって、自分の音楽をすとかピアノを弾とか歌うとか、そういう気分には全くなれませんでした。生活のこと、衣食住ですよ、学校の避難所でもそうです。食べること、住むところ、そういう衣食住があってこそその音楽や美術、心のゆとりの中から生まれるものです。私が一番最初に音楽がそろそろと思えたのは避難所で避難の方のお世話をさせていただいたときです。避難所で何か月か経った時に、救援物資とかお弁当などの生活で必要になるもの以外の花を各部屋に届けた時に、避難所である学校で生活されていた方の花を愛でる気持ちが戻ってきたのです。その時に、「やっと少しずつ芸術も戻ってくるのかな」と思いました。

その後、私が今までで他の方に言われた言葉で一番傷つき、そしてそういうふうに使われているのだなと思ったことがありました。地震から2年くらい経って、ある程度「しあわせ運べるよ

うに」が有名になった時でした。ある学校の飲み会で校長先生から「あの震災の混乱のさなかによく歌を作る暇があったな」と言われました。先ほど申し上げましたが、私はこの歌を瞬間的に込み上げた言葉をメモ帳に走り書きをして、数分間で作ったんです。今から震災の歌を作るぞと身構えて作ったわけではありません。それまでも、そうやって地震までに多分150曲、200曲の歌を子供たちのために既に作ってきました。例えば職員会議の途中とか研修の途中に自分の関係ないことが話題になっている時に、国語の教材のモチモチの木この部分の作曲を頼まれたのを、研究の間に全部教科書の「モチモチの木」の中から歌を作っていたりしていました。一緒に勤めていた人は、私がそうやって歌を、楽器も一切使わずに作っているということを知っているのですが、地震の時もそういう状況で作ったんだろうなということを知っていただけるんですが、知らない人は作曲するとなるとすごく身構えて、ゆとりを持って曲を作っていると思われるので、こういうことも説明していかないとわかってもらえない、そんなゆとりのある中では作っていないからこそ、この歌は生々しいと言われるんです。避難所の空気感とか私の置かれていた状況、その当時の子供たちの思いとか色んなものが絡みついて残っていると思うので、そんなゆとりの中で歌を作ったんじゃないと、その時に思ったのが一番残っています。

中田：白井先生、本当に貴重なお話ありがとうございました。

中嶋：このことはお伝えしたいなと思います。東日本大震災の時もですけど、私が駆けつけたのはひと月後です。阪神淡路大震災の時、ひと月後くらいからお母さん方からのご相談の電話が相次いだんです。子供にチック症が出た、おねしょするようになった、心が不安定でなにより可哀そうだったのは笑わなくなったと。それで急いでギャラリーに頼み込んで絵画教室を始めました。白い紙にいっぱい絵具を置いて待っていたよって子供たちを迎えました。すると子供たちは描きだして、顔が、瞳が変わったんです。硬い顔の子たちが1時間もしないうちに柔らかい顔になって、鼻歌まで出てきました。だから絵にはこれだけの力があると思ったので、東日本大震災の時にはひと月後に駆けつけました。広い運動場で描いた青空教室の時に、描き終わった後に子供たちが「先生、楽しかった」って。「あの地震から、津波から初めて笑った」とか、「初めて友達と抱き合った」とか。復活させる、楽しくさせる、音楽と絵には力があるというのをあの時思いました。そして、「絶対また来てね」と言われたんです。その時私は本当に嬉しくて、「また来るね」って言って、それから今もずっと続けています。あの時あの子供たちが私に抱き付いてきて、「また来てね」っていうその言葉が今でも忘れられません。だからこうして行き続けております。

中田：ありがとうございました。これは非常に難しい問題なのかもしれませんが、一つヒントが得られたのは、白井先生がおっしゃった避難所に花が届けられて少し心のゆとりが出始めた頃に、いわゆるアートをお届けしていくのが良いのかなということです。災害に直面した本当に大変な時にはひょっとしたら我々はそうしたところ目を向ける心の余裕がないのかもしれませんが。しかしながら、こうした支援は、長く、そして幅の広い分野で力を与え続けることが出来ることだと思います。もちろん中嶋先生の絵もそうです。

本学社会防災学科の教員の多くは実際に災害支援を行っています。私自身は被災地への医療支援を行っており、特に発災した最初の4日間、長くても1か月くらいのところまでの支援で、それ

から先は被災地の医療機関に引き継いで、私自身はその後日常生活へと戻っていきます。しかしその先の被災地はどうなっているんだろう、だれがどんな支援をしているのだろうというのが、やはりどこかでずっと気になっていました。今回、先生方のお話を伺っていくと、温かな思いを被災者の心に届けていく支援を継続してなされている。そして音楽も絵もそうなんですけど本当に幅の広い支援だと思います。医療を届けるというと限定された支援なのかもしれませんが、曲を創る、絵を創る、そして曲や絵を被災地に届けるというのは、人の感性に働きかける、つまりは多くの方々に届けることができる息の長い支援の形なのかなと思ったりします。私は失礼ながら臼井先生の前にこの曲の存在を知りました。良い曲があるなと思って早速書店で楽譜を手に入れたことを思い出します。また中嶋先生の絵の方は拝見したことがないのですが、私の自宅には手塚治虫先生のアニメ、ブラックジャックの絵を飾っていて、それを眺めては時々自分自身を見直したりしています。つまりは何気ない日常の中に当たり前のように音楽や絵といったアートは自然な形で存在していることがわかります。

さてここでまだ時間に少し余裕がありますが、会場の皆さんから是非お二人の先生に確認したいこと、お訊きになりたいことありましたら、いかがでしょうか。是非挙手をしてお願いします。佐伯先生いかがでしょうか。

**佐伯：**私の専門はもともと建築をやっていたんですけど、仕事は建築本流ではなくて変わったことをやりたいと思って、損害保険の仕事をしてきました。ですので災害の保険とかマネジメントが専門です。先ほど中嶋先生が地震のすぐ後に経営者はお金があって力があるという話をしていて、私はそのお金の方の話を主に専門にしているのですが、私がやっていることが反論だとは思わないですね。みんないろんな立場があつていろんな得意技があつて、そういうのを発揮してみんなで復興にあたっていこうということが良い在り方だなと思って今日お話を聞いていました。今日は、私が普段考えていないところで、こういうことを考えてらっしゃる方がいるんだというすごく良いお話を聞けてとても良かったと思います。質問者なくてコメントになってしまいました。

**中田：**ありがとうございます。他の皆さんからいかがでしょうか。安富先生、お願いいたします。

**安富：**神戸学院大学安富です。中嶋先生ご無沙汰しております。私の専門は実は災害情報なんですけども、今の臼井先生と中嶋先生お二人のことは一つは癒しの力だと思うんです。僕の専門から見ると、伝える力というのもすごくあるなと思って、それも26年経っても歌が残って、絵が残っていくというのは、伝えていく力というのはなかなか難しいんですよね。伝え遺すということが難しい中で、音楽であるとか絵ということで遺していくのは素晴らしいなと思って。災害情動的にもそういう伝え方というのは、一つの大きなポイントかなと思いました。ありがとうございます。

大した質問ではないんですけど、僕音楽は苦手なんです、歌うのは好きなんですけど、中田先生は歌が上手いけど僕は音痴なんです。ついさっき、詩が先にパッと浮かんだと仰ってましたけど、普通音楽家だと作詞家と作曲家と分かれていますけど、先生は両方、だいたい詩があつて、

後に歌が、曲が付いてくるんですか。それは全部浮かんでくるんですか。素晴らしいですね、そういう才能全くないので。特に曲というのは僕ら浮かばないんですけどね。

**白井**：子供の時に得意だったのが国語と音楽で、言葉、作文とかも得意だったということと、私の場合絶対作詞が先で、作詞のおおまかなスケッチのように描いてから、それを自分で歌ってその歌を忘れないようにカタカナで書く、後で楽譜にするというような感じの作り方です。曲の方は瞬間的に出来るんです。歌詞の方でちょっと悩むということで、それは幼稚園の頃からそういうことをしていたので、メロディに関してはずっと困らないのです。だから400曲作ってきました。さっきのコロナの歌みたいに玄関ホールに立っている時に同じことばかり言っているからこれにメロディを付けたら、ってその場で作ってカタカナで書いて、こうやって歌は出来るんです。今年来た教頭先生がやっぱり驚いていましたけど、

**安富**：カタカナで書くというのは何か意味があるんですか。

**白井**：忘れないためです。ソファミファミファミレ、とかってリズムとか音程は全部自分の中に入っているけど忘れてしまうんですよ、次の日になったら良い曲出来たのにどんなんだったっかって。

**安富**：だいたい曲とリズムが出来ているところに、言葉が乗っていく。

**白井**：音のリズムだけを忘れないように。小学校向けの曲を作ってきたので、ほとんどはハ長調の4分の4拍子の曲ですので、カタカナで書いておけば全部後で楽譜にすぐ直せるということです。忘れないようにしているという感じです。

**安富**：ありがとうございます。

**中田**：ありがとうございます。他の皆さんいかがでしょうか。稲沢君、ちょうど当てようと思っていました。学年とお名前をお願いします。

**稲沢**：1回生の稲澤遙樹と申します、よろしく願いいたします。貴重なお話ありがとうございました。お二人ともお名前は聞いたことがありまして、まさか今日お会いできるといって思いませんで、非常に嬉しいなと思いつながらお聞きしておりました。

白井先生に少し質問をしたいなと思うんですけども、震災とアートという先ほど映像の中にもありました、子供たちが口ずさみやすい曲を作曲されているということで、後は最後の方にありました作曲というものは瞬間的に歌詞が浮かんでくるというお話がありまして、実は私の父が作曲家でして、うちの父は歌詞というよりも作曲の方でして、作曲の音の並びがパッと浮かんだ瞬間に曲にするというタイプの人なんです。それで、子供たちが口ずさみやすい曲を、ということだったんですけど、それは作曲されているときに、例えばやっぱり覚えやすいメロディラインじゃないとダメだと思うんで、イヤーワムしやすいように順番に高くしていったり、なにかこう

作曲される際に気を付けていることなど、そのようなことがありますか。良ければ教えていただけると嬉しいです。

白井：それはないですよ。だから、今日も一日頑張ろうって歌詞が、自分でね、自然学校の朝に歌うとって、「今日も一日頑張ろう」と歌ったら「ミレドドシドレミレ」みたいな、だから歌詞から来るものを自分で受け止めてメロディにするという感じです。それが結果として400曲。並べてみたら、みんな子供がすぐに音楽室出るときに歌って帰るとか、それを聞いた担任の先生たちが頭の中でメロディがぐるぐるまわるとよく言われていたんですけど、それくらいインパクトがあったのかなと思うので、それは一応能力的に持っていたものかなと思います。

稲沢：感覚的に。

白井：はい。

稲沢：さすが、すごいと思います。ありがとうございます。

中田：なぜか曲作りの方向に質問に移っているような気がしますが、まずはありがとうございました。曲作りは皆さんにとっても興味のあるところかもしれないですね。会場の方から他にご質問いかがでしょうか。

松本：初めまして。社会防災学科3回の松本と言います。今日はお話ありがとうございました。まずコメントというか感想なんですけど、今まで震災の時だったら自分としては水であったり、食料とか、住まいとか、という話を主流で考えていたんですけど、今回の話はどちらかというところと、娯楽、娯楽と言っていいのかわからないんですけど、アートというので人を喜ばせる、被災した人を楽しませるといった観点のお話が聞いて自分としても新しい見方が出来たなというふうにして、持つことができてありがとうございました。

それで、とても難しい話だと思うんですけど、これから南海トラフ地震とかそういった大きな地震が起きた時にお二人ならどういった活動であったり、過去の経験を踏まえて、という話で、少しこじつけになるかもしれないんですけど、震災というか災害に遭った時にどうされるのかなというのを聞けたらなと思います。

中田：ありがとうございました。ちょうど、私から最後に質問しようと思っていたのが、これからお二人はどのように活動を展開していきたいか、そして今日お見えになっている方々へのメッセージでした。是非ともこの質問の答えと併せて先生方にお話しただければと思います。中嶋先生の方からお願いします。

中嶋：これからも被災地支援、東北の方の支援はずっと身体が動くまで、私の足が利くまで続けていきたいです。今は子供だけではなくてお年寄りにも色紙絵を教えたり、絵を描きながら傾聴の会みたいなものでやっていこうと思っています。それと私は今、アトリエでやっており

ます命の授業というのがあるんですけど、震災を経験していない子供たちが震災を経験した人の話をじっくり聞いて、もしもあの時あの場所に私が、僕が居たならばという想像を巡らせて描く作品ですけども、これを毎年アトリエではやっております。ですので、今もすごい数が集まっております。その中の選りすぐりを今日発表させていただいたんですけども、今年もまた素晴らしい作品がたくさん出ております。それと並行して、この絵で伝える力と言いましたら、子供たちの力をどう発表するかとなった時に、私が考えておりますのは防災ポスターですね。あの絵の力をもってどういうふうにして地震に備えるとか、津波に備えるとか、津波が来たらとにかく高台へ逃げようとか、この目で見るとインパクトは強いですよ。パッと来た時に印象に残りますので。子供たちの絵には何度も言いますが不思議な力を持っています。ですから、防災ポスターとかそういうことに、それから震災の絵を思い描いて、想像して描くというこのことはずっと続けていきたいと思っています。そして、後世にずっと遺していって継承していただきたいと思っています。

中田：中嶋先生、ありがとうございます。拍手をお願いいたします。それでは臼井先生お願いいたします。

臼井：東日本の地震が起こった時には阪神淡路から約15年くらい経過していました。その15年前には全然思いもしなかったことですが、ネット上で作者の私を越えてどんどん曲が先に広がってしまいました。私の知らないところで新聞社とかも勝手に送ったりしていて、抗議をしたこともありました。私は自分自身が被災者だったので、震災直後にそんな復興の歌とかそういうものを聞きたくもないということを絶対思っていました。火に油を注ぐようなものです。それも自分が納得いくような演奏ではなく、大人の人が歌った歌であったりとか。やっぱり子供たちが歌うからこの歌は命を持っているのにかと思いました。それらを止めるのに苦労しました。

半年くらい経って、先ほど言ったようにある程度衣食住の目途がついてちょっと心のゆとりがある時に本を出版させていただいて、それにCDを付けてその印税をすべて東日本に寄付するという事で支援をさせていただきました。それを考えると、次に地震が起こった時にもまた同じようなことが起こると思います。10年経ってからやっと「しあわせ運べるように」の歌が受け入れられたという遺族の方のお話も聞いているので、やっぱり心の応援とか、そういうものは一番いい形で一番いい時期にしか入っていかない。それこそ、ゆとりの中で芸術は生まれてきたものなので、ある程度そういうゆとりの時に今後もこの歌が活かされていけばと思います。ですので、特にこれから先はやはり被災地でない全国の子供たちが知っている歌にまずしていきたいなと思っています。そして、この歌はいろんな東日本の地域でも熊本の子供たちにも歌われています。震災の記憶や、被災地の思いというのは神戸の部分も熊本、福島に変えるだけでみんな同じ思いだったと思います。「しあわせ運べるように」を知らなくても、神戸の部分も熊本に変えて歌って以降、熊本の方もこの曲を初めて知って涙をされて、というところから広がっていています。そういう形で子供たちのオリジナルの曲を全国の子供たちに伝えていくということが、今後の活動としては一番にやっていきたいなと思っています。以上です。



**中田**：白井先生ありがとうございました。もう少し会場の皆さんから質問をお受けしたり、お二人のお話を訊いていきたいと思うのですが、予定の時間が近づいているようです。よってそろそろまとめに入りたいと思います。今日のテーマは、歌の力、絵の力というのは一体どういう力があるのだろうか、それを確認して新しい災害時の支援の在り方を考えていくことでした。皆さんはいかがでしたでしょうか。私は、歌の力、絵の力によって心を揺さぶられ、慰められたり励まされたり、あるいは新発見があったり。そしてそれをきっかけに、まさに次の一步を踏み出していく、そんな力を与えてくれるものではないかな、と今思っています。是非、お二人の先生方にはこれからもさらに頑張ってくださいと同時に、私たちが今日学んだことを踏まえて、私たちに出来ることは何なのか、日々共に学び考えながら、活動をしていくことが大切なんだな、とも思いました。さて、まとめにあたりまして、拙いコーディネーターでしたが、皆さんのご協力でなんとかこのパネルディスカッションの締めくくりを無事に迎えることができそうです。皆様に心から感謝申し上げます。また何より素晴らしいご報告をいただいたお二人の先生方にもう一度盛大な拍手をお贈りいただき、パネルディスカッションをお開きにいたしたいと思います。本当にありがとうございました。

**司会**：ありがとうございました。貴重なお話をいただきました、中田先生、白井先生、中嶋先生に今一度大きな拍手をお願いいたします。